

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	竹本 晋也
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授） 谷 田 増 幸 副主査：（岐阜大学教授） 柳 沼 良 太 委 員：（鳴門教育大学教授） 田 村 隆 宏 委 員：（岡山大学教授） 西 山 修 委 員：（兵庫教育大学教授） 勝 見 健 史
3. 論文題目	〈教育の言語〉に関する研究序説 —道徳授業における営為の哲学的な考察を通して—
4. 審査結果の要旨	先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 竹本晋也 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年2月11日（火・祝） 16時15分～17時00分 場所：Zoomによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 本論文は序章から終章まで、6つの章において構成されている。 序 章 本研究の構想 第1節 〈教育の言語〉 第2節 教育学のパトス論的転回 第3節 ことばの回復 第4節 対象と方法 第5節 構成 第1章 道徳授業における“きく”営み—鷲田清一を手がかりに— 第1節 “きく”営みの現況 第2節 “きく”の六つの側面 第3節 “きく”がもつ力の再認識 第2章 道徳授業における“書く”営み—オング, W.を手がかりに— 第1節 “書く”営みの現況 第2節 相反するオング解釈とその批判 第3節 マクルーハンのメディア論 第4節 終末に文字を“書く”営みへの示唆 第5節 オラリティーとリテラシーの共鳴 補 節 “書く”営みと評価 第3章 道徳授業における“話し合う”営み—ローティ, R.を手がかりに— 第1節 “話し合う”営みの現況 第2節 リベラル・アイロニストの思想 第3節 終わることのない会話 第4節 “話し合う”営みの再記述 第5節 教育としての会話 第4章 道徳授業における“見る”営み—マードック, I.を手がかりに— 第1節 “見る”営みの現況 第2節 マードックの〈見方の倫理〉 第3節 〈見ることを学ぶ〉道徳授業 第4節 自己の解体 終 章 本研究の総括 第1節 〈教育の言語〉の一端 第2節 糸口としての〈あいだ〉 第3節 今後の課題 引用文献

各章の概要は以下のとおりである。

本研究の目的は、特別の教科道徳(以下、「道徳科」と略記する。)が誕生して以降、道徳授業において散見される“きく”、“書く”、“話し合う”、“見る”という四つの営為についての哲学的な考察を通して、〈教育の言語〉(language for education)について研究するための糸口を明らかにすることにある。ただし、本研究はこの四つの営為についての考察を通して、道徳授業の実践に対しても貢献できるものと考えられる。

序章では、本研究が主題とする〈教育の言語〉に関わって、まず教育学のパトス論的転回の立場からの一つの問題、次には中村雄二郎のことばの回復の立場からの一つの問題が指摘される。重なり合う部分をもつこれら二つの問題が〈教育の言語〉(language for education)について研究するための大きな手がかりになると捉え、本研究では、2015(H27)年一部改正の学習指導要領に基づいて始まった道徳科の授業を哲学的な考察の対象として取り上げている。つまり、ことばの仕入れと日常のことばの使用に意を向けながら自らが道徳授業について語ることを通して、〈教育の言語〉についての思索を深めようとする本研究の出発点とその方向性が示される。

第1章では、鷺田清一を手がかりに、道徳授業における“きく”という営みについて、身体、場所、時間、計画、方向、存在という六つの側面から考察が行われた。そのなかで、道徳授業において、真摯に子どもの声に耳を傾ける教師は、一概には選択することが難しい問いをつねに突き付けられることが見えてきた。くわえて、そのような教師の“きく”という営みが、実は道徳授業の成否を左右するほどの大きな影響を及ぼしていることを明らかにした。

第2章では、オング、W.やマクルーハン、M.を手がかりに、道徳授業における“書く”という営みについて、オラリティーとリテラシーの共鳴という視座から考察が行われた。この考察を通して、道徳授業の終末に文字を“書く”営みを豊かにするための「一旦、目を閉じること」、「話すように書くこと」、「文字を声としてのことばにうつしかえること」という三つの提案が示されるとともに、リテラシーがいかにオラリティーに根差しているかということが明らかにされた。道徳授業への評価の導入を一つの背景に、道徳授業において書く活動が広く取り入れられてきた状況にあって、改めて道徳授業におけるオラリティーの意義について再考する契機が提供された。また補節においては、そのような背景となった道徳授業における評価をめぐる議論について焦点を当てて論じられた。ここでは、道徳授業が、学習評価論やカリキュラム論といった他の学問領域のことばや概念の何をどのように受容するのか、または受容してはならないのかという視点が必要であることが指摘された。別言すれば、所謂流行に踊らされることなく、道徳授業の特質を見失わない冷静かつ建設的な議論を積み重ねていく必要性が示された。

第3章では、ローティ、R.のリベラル・アイロニストの思想を手がかりに、道徳授業における“話し合う”という営みについて考察がなされた。そのなかで、道徳授業において広くめざされている対話という話し合いのあり方に対し、「それ自体が目的となる会話」、「想像力で営む公的な会話」、「非方法的な会話」という目的・手段の構図に回収されない話し合いのあり方を提案された。その上で、対話か会話かという二者択一の枠組みで捉えるのではなく、話し合うという営みにおいて、授業者である教師自身が、「工夫と拘束の狭間」、「公と私の狭間」、「一致と不一致の狭間」という三つの狭間に身を置くことの重要性が指摘された。

第4章では、マードック、I.の見方の倫理を手がかりに、道徳授業における“見る”という営みについて考察した。可視化や視覚化といったことばに象徴されるように、目で見ることや目に見えることに対する信頼は高まり、それらが思考の手段にされる傾向にあるが、そもそも見ることそれ自体を学ぶ道徳授業という別のあり方について検討した。また、そのような手段化された見る営みは、世界を見る私として自己が強化されることになるが、自己と世界は、見る私と見られる世界という二分された関係になく、両者はどこまでも不可分であることが指摘された。人間には、世界をありのまま把握することなど到底できず、自身が抱える弱さや醜さに向き合い、その苦しさや重さに抗いながらも、いかに生きるかということを考え続けることを求める道徳授業は、教育 DX や個別最適な学びといった語りが趨勢となる現在の教育にあって、その存在価値がより一層問われることが明らかになった。

本研究の目的は、道徳科が誕生して以降、道徳授業において散見される“きく”、“書く”、“話し合う”、“見る”という四つの営為についての哲学的な考察を通して、〈教育の言語〉について研究するためのさらなる糸口を明らかにすることにあった。終章では、その糸口として〈あいだ〉の概念が提案される。第1節では、各章を内容的視座から振り返った上で、各章が照らし出す〈教育の言語〉の一端について論じるとともに、糸口としての〈あいだ〉を明らかにされる。第2節では、第1章から第4章に共通して使用された教育実践の言語と哲学の言語について、両者に生まれる〈あいだ〉の意義について論じられた。第3節では、今後の課題が整理された。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、全国学会誌である、単著3編の査読付き単著論文として、『道德教育方法研究』（日本道德教育方法学会，2020年，第25号，1-10頁），『道德教育方法研究』（日本道德教育方法学会，2022年，第27号，11-20頁），『教育実践学研究』（日本教育実践学会，2023年，第24巻第2号，13-26頁）から成る。これらの研究成果の審査を含め，5名の審査委員は以下の点について討議した。

(1) 論文の独創性

本研究の独創性は，日々実際散見される教育実践（道德授業）に対して敢えて哲学的に考察することを通して，〈教育の言語〉（language for education）について研究する糸口を得ようと試みている点にある。別言すれば，終章第2節で述べているように，哲学の言語と教育実践の言語という遠く離れた複数の言語を本研究において意図的に交錯させることによって，単一言語の語りでは見出すことができない，別の地平を拓こうと試みている点にある。そのことによって，日々の教育実践（道德授業）の営為を新たな視点から捉え直すことができると考える。

(2) 論文の発展性

本研究は，〈教育の言語〉に関する研究のあくまで序説としての位置付けをもつものである。したがって，本研究は序説としても，まだ緒に就いたばかりである。けれども，哲学の言語と教育実践の言語という遠く離れた複数の言語を本研究において意図的に交錯させることによって得られた別の地平から教育実践（道德授業）を語るとき，教育実践に係る今まで等閑視されていた現象を豊かに捉え直すことができるものと考ええる。本研究ではそれを道德授業における“きく”，“書く”，“話し合う”，“見る”という四つの営為に焦点化して記したものである。その意味からすると，こうしたアプローチは，他の異なる教育実践についても同様に哲学的な考察を通して，〈教育の言語〉が備えなければならないであろう〈あいだ〉についてさらに考察していく展開となり得るものである。

(3) 学校教育の実践への貢献

教育学に対して，それとは一線を画す，教育実践学という学問分野（もしくは言語）を構築することは，一定の意義があると考ええる。ただ，このことを本研究の関心から捉えるなら，その構築に留まらず，教育学の言語と教育実践学の言語が交わり，そこに豊かな会話を生むことこそ，めざされるべきであると考ええる。本研究は，そのような会話を生むことに寄与するものである。

また，学校教育の大部分が，多様な言語使用者（ステークホルダー）が関わる公教育であることを踏まえれば，学校教育に従事する教師自身が，それらの異なる複数の言語を聴き分けつつ，一定程度の会話をすることができてこそ，豊かな教育実践を自律的に行うことができる。言語への注意を促す本研究は，そのような教師に示唆を与えるものであると考える。

3. 審査結果

以上により，本審査委員会は，竹本晋也 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。